
面影

いかれ帽子屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

面影

【Nコード】

N4917V

【作者名】

いかれ帽子屋

【あらすじ】

久遠深月の子供、ナミネを連れて東京で被災した城戸貴春は安藤という女性に出会い、家に泊まることになる

彼女の言ったエドワード・スピネルの言葉を聞き、城戸はナミネの中にある深月の面影に想いを馳せる

『マリアノイズ』から数年後の物語

三月に新入生歓迎本のために書いた小説です

本当は、沢渡藤花に逢いに行く物語だったけど、ページの都合で路

面影？

オリーブの葉が夜風にそよぐ。簡素なベランダの両端に置かれた若木は、まだ心もとない枝葉を赤茶色の植木鉢に頼って必死で支えていた。縁取りに沿った土のあとを見るかぎり、どうやら二つの鉢は元々近くに置かれていたようだ。城戸貴春は眼下の渋滞に目を移し、愚者の行進と言いつた。

「実に浅はかだ。解法を自分だけが手に入れたものと思い、ことを急ぐから同じ過ちをする者は皆、否応なく身を寄せ合うことになるのだ」

ふと見ると土のこびりついた固形肥料が転がっていた。土に埋めて使うタイプのものだ。撒く際にこぼしたのだろう。

「そんなところにいると風邪ひくよ教授」

「余計なお世話だよ浪人生」

安藤の呼びかけを受けて、ベランダを後にする。

「ところで聞きたいのだが、なぜオリーブを離して植えているのだから？」

すぐに返事があった。

「とくに理由なんてありませんよ」

部屋は暗い。押し入れをあさる安藤の手元を背伸びした久遠ナミネが携帯電話の明かりで照らす。懐中電灯はまだ見つからない。

「ごめんね。越してきたばかりでさ、どこしまったかわからなくなっちゃった。教授は悪いけど冷蔵庫から食べられそうなものを袋に詰めて。キッチンの下にビニール袋があるから」

なぜこんな小娘にあごで使われなければならないのか。疑問を持ちながらも渋々、キッチンへ足を運んだ。

冷蔵庫内の明かりも落ちてしまっている。手探りで食品を選んでやっと闇に慣れてきた目に近づけて確認し、袋に入れる。缶チューハイはかさばるだろうから持っていないことにした。思わず掴ん

でしまった生肉の冷たさが言いようのない不快感を城戸に与える。

適当に詰め終えてリビングに戻ろうとして小指を戸にぶつけ、城戸は声にならない悲鳴を上げた。

「大丈夫ですか？」

ナミネの声に短く「ああ」と答える。よりにもよって、テレビ局に赴いた東京で被災するとはつくづく運が悪いと城戸の心中は穏やかではない。

アパートの前の広場に思い思いの食料と光源を持ち寄った住人が口々に地震について話し合っている。雑音だと思った矢先に安藤が、「暗い話題を暗い中でするとますます暗くなるばかりです。小さな子だっているんですよ。大人がそんな顔をしていたら子供だって不安になってしまいます。とりあえず今は食べましょう。食べることは、すなわち生きることです」

と言い放ち、一人さっさと料理に手をつけて美味しいと頬をゆるませてナミネにも食べることを勧める。

城戸が「君は新顔ではないのかね」と耳打ちすると彼女は「わざわざらしい人間関係がない今だからこそ言うんですよ」と得意げに答えた。聞けば、この立食の場を提案したのも彼女だという。

「エドワード・スピネルの『明かりの灯らない夜に』っていう短編小説で街が停電したとき、食材を傷ませてしまいうくらいならレストランの従業員がロウソクの持参を条件に地域の人にご馳走を振る舞うエピソードがあるのを思い出したんです」

それにと彼女ははにかんで続ける。「冷蔵庫に満足な食料が無くて」

「実に卑しい発想だ」

「その恩恵に教授は預かっているんですよ」

ただ渋滞はしないだろうな。城戸も素直に手を伸ばすことにした。中年男性に酒を勧められた安藤が、アルコールは匂いを嗅いだだけでもう駄目なんですよと言ってやんわりと断る。しばらくして彼女は夜を見上げてつぶやいた。

「でも明かりが着かないと夜ってこんなにも暗いんですね」

「一分間の消灯がエジソンの生涯を称えたくらいだからな」

「すごいなあエジソンは。死んでもなお、私たちの生活に息づいて
いるんだから。スピネルの言葉を借りれば」

安藤は一拍置いてから言い切る。

「『偉大な者は死んでいった。そうでない者は皆、忘れ去られてしま
った』」

面影？

久遠深月。数年前に癌で他界したナミネの母親の名前だ。洪水のように押し寄せる悲しみが去ったあと、世界に何も残っていないかったなら私の虚しさも無かったのだろうか。城戸は今もまぶたの裏に焼き付く彼女のことを忘れられない。病院の屋上で城戸を覗き込む姿、はためくシーツもパノラマのような街並みも全部覚えていた。思い出の中の彼女はあまりに美しかった。

けれど不安は募っていく。私は深月との思い出を美化しているのではないかと。

ナミネに父親はいない。少なくとも深月の父親とはそれで合意している。深月はマリアだった。ナミネが暴行を受けて授かった子だとは口が裂けても伝えられない。

城戸は自分の立ち位置がわからなくなる。

公園で遊ぶナミネが一輪の花を持って駆け寄って来て、

「お父さん、この花は何ですか？」

と聞いても、まず城戸は「私は君の父親ではないのだよ」と諭す。非情かも知れないが、それが事実だった。すると決まってナミネはうつむいて顔を陰らせてしまう。胸が痛んだ。ナミネには深月の面影がある。濡れたような瞳と左右に揺れる髪。亡き者の姿をそこに見るのはつらかったが離れることはできない。

夕陽が敷地を真っ赤にそめる頃。子供が転び、泣き声が聞こえて来た。すぐに親が駆け寄り、頭を撫でる。手をつないで公園を出て行く親子連れの背中を目で追い、もし深月が生きていたらなどという不毛な想像をしてしまう。しかし、上手く思い描けなかった。

ベンチに腰を降ろし、ベッドの上で日に日に弱る深月に何もしてやれなかったことを悔やんだ。不安そうな彼女の頭に手を添えてやることさえしなかった。

歩幅の短い足音が背中では止まる。横目で見やった。そのとき、城

戸の感情は確かに比重を持っていて胸を締め付けた。

足元にまで伸びたナミネの細い影は、確かに深月をかたどっていた。君が遠い。城戸はうなだれる。

失意を感じ取ったのか、ナミネが後ろから抱きつく。どうしていいか、もうわからない。

それは単なる気まぐれだった。糸電話をこしらえると片方をナミネに手渡し、紙コップに口元を寄せると小さく「あ」と言う。ナミネはいたく気に入ったようで、同じように「あ」とつぶやいた。少しだけ振動がこそばゆい。

「わたしの声は聞こえますか？」

ナミネの言葉に一瞬、息を飲む。けれど城戸は平静を装う。

「聞こえているよ。ちゃんと聞こえる」

いつ切れてもおかしくないような糸で二人はささやかな繋がりを保っていた。

面影？

立食会が終わり、電気が戻ったので風呂を沸かし、先に城戸が入ることになった。「女性の残り湯に浸かれると思ったら大間違いですよ」とうそぶく安藤を城戸は黙って睨む。

彼女が風呂の電気を着けようとしたが、キッチンや玄関にばかり明かりが点る。

風呂から上がると、男ものの洋服が用意されていた。

「近くに住んでる彼氏のです」

安藤がはにかむ。無関心な城戸の反応は素っ気ない。見やると部屋の隅にある手提げ袋から、スウェットがこぼれていて、すぐに目を背けた。

「ナミネちゃんは私と一緒に入ろうね。トイレは大丈夫？」

安藤がナミネに付き添う。便座が降りる音がして、城戸は違和感を覚えた。さっきから何かが引っ掛かっていた。

「そうそう、教授。あとで受験に出るポイントとか教えてくださいよ」

「シロクマの進化の成果とも言える毛皮を奪うのに数時間とかからない。だが何故、シロクマが極寒に耐えうるのか、そのシステムを解明するまで実に途方もない時間が費やされた。知識とは積み重ねなのだ。あきらめたまえ」

地震が起きて、電車が止まった。人々で改札口の前は溢れかえっている。やり場のない感情が駅員に向けられている。矢面に立たされた彼に同情した。駅員だって混乱しているし家族がいれば当然、心配もしているだろう。けれど詰め寄る乗客を邪険にも扱えず、四方八方からの主張を彼らはやめない。

予約していたホテルは隣の駅にあった。歩けない距離ではないし、日も落ちていた。何より雑音の中にいることが耐え難かった。

駅員が張り上げた声は城戸には届かない。

「誰も聞いちゃいないんだよね」

亜麻色の髪的女性が横で呟いた。

「みんな、自分のことばかり。言いたいことだけはちゃんと言うのに、人の話はまるで聞かないの。本当はあの人たちだって、どうにもならないことくらいわかってるんだよ」

だってさ、と彼女は言葉を切った。「例え、ちいさな声でも、ちゃんと届くから大事なことのね」

その時、強い余震があった。レンガが何かが落ちて碎ける音がして、誰かが大声で叫んだ。「崩れてくるぞ」

「バカが！」

思わず城戸が漏らした声も、あつという間に雑踏に飲まれた。その場は騒然となり、堰を切ったようにパニックになった人々が我先にと走りだす。

誰かの手に糸が引っ掛かり、千切れたコップはすぐに見えなくなった。

「糸電話が」

ナミネが追いかけようと手をほどこいたが、すかさず城戸は小さな身体を抱きとめて、なるべく小さくなるようにしゃがみ込む。背中を幾度か蹴られたし、罵倒もあったように思う。それでも決して離さなかった。

人がいなくなった改札口で城戸はようやく立ち上がり、埃をはらう。暗い中、張りつめた緊張感。その最中で不用意なことを言い、一人が走り出せばもう誰も止まらないことがわからないのか。城戸は心中で毒づいた。

「勘弁してくれ。私にはもう、お前しかないんだ」

「ごめんなさい」

踏みつけられて形の崩れた紙コップが転がっている。拾い上げたナミネがなんとか戻そうと試みるが、元には戻らなかった。こびり付いた足跡も擦るだけ広がっていった。

「糸電話なんて、また作れば良いだろう」

「これじゃないと嫌です」

「わがままを言うな」

城戸は抑揚のない声で言う。けれどナミネは譲らず、そればかりかボロボロと泣き始める。埒が明かない。

「じゃあ、こうしよう。おねえさんを間に挟んでみない？」

先程の、亜麻色の髪的女性が立っていた。

「ついでに送って行ってよ、鯨の教授」

面影？（前書き）

面影？

茨城県の海岸に数十頭に及ぶ鯨が打ち上げられた。ニュージールランドを襲った大地震の二日前にも同じことがあり、その関連性について述べる為に城戸ははるばる東京に呼ばれた。彼女はその番組を見ていたのと言う。

「やっぱり前兆ってあるんですね」

満天の星が厳かにまたたく。けれど、託すような願いは城戸にはもうなかった。

泣き疲れて眠ってしまったナミネを背負う。こんなに大きくなったのか。深月がいなくなってから過ぎ去った時間を思い知らされた。「教授が悪いよ。気まぐれのつもりでも、ナミネちゃんにとっては教授がくれた初めての特別なものなんだから。それってもう理屈じゃないんだよ」

ばつが悪そうに城戸は黙々と歩く。

「でもさ、まさか本当に送っていつてくれるとは思わなかった」

「停電の夜に女性をひとり歩かせるような真似をさせられるか」

「さすが教授は紳士ね」

茶化すように安藤は言った。

「リアリティの度合いというものは人によって大きく異なるものだ。如何に想像力に現実味を帯びさせ、注意深くなれるかは経験によって違ってくる。アフガニスタンと日本。同年代の子供であっても死の持つリアリティは決して同じにはならない」

「それはまるで、夜道の危険性を嫌というほど知っているみたいな口振りですね」

知っている。城戸は冷たく言い放つ。後悔しない日々は無かった。

「危機感の足りない動物はサバンナには一匹たりともいない。そういう個体はさっさと死に絶えるからだ」

夜の闇が何もかも内包している。足先に触れる、見えない小石も、

苦い記憶もそこに投影することが出来た。

「ほとんどの動物は夜を恐れてきた。あるものは狩る側になることで身を守り、あるものは夜を生き抜く知恵を仲間を失った経験から獲得した。弱肉強食の世界で起こるすべてのことは自己責任だ。だが自己責任の一言で何事も片付けるわけにはいかないのが人間だ」

ちいさなアパートの前に付く。時計は午後八時を回っていた。

「本当に負ぶっていくつもり？ 一区間って言っても歩いたら遠いですよ」

「どうしろと言うのだ」

「二つの選択肢があるわ。一つは意地でも歩いて行く。もう一つは妥協して安全な寢床をさっさと確保すること。夜の怖さを知っている子供連れの動物はどちらを選ぶんですかね」

日中はコンビニに行った。安藤にリストを手渡され、買い出しに出されたのだ。

コンビニの食品棚は空っぽであった。特にパンのコーナーはそれが顕著で、他にも懐中電灯や電池類が店頭から姿を消していた。

しばらくして、トラックが店の前に駐車した。物資の補給だった。商品が台車に乗せられて入店すると、次第に店内にいた客が集まって来て、陳列を待つ。死体に群がるハイエナのようなだと城戸は思った。近くにある新聞を手取る。ページ数が少ない上に地震の話題で埋まっていた新聞にも新刊の案内が載り始める。

街頭のニュースを見れば、地震を気にかけているとインタビューに答えた女性が箱根の観光に興じていた。

いつだって人は、自分が下敷きになっているものから目を背ける。牛や豚のことを気にかけていては肉は食べられない。しかし口先だけというのは、いささかならず卑怯ではないだろうか。無関心なら、そう言えば良い。例外なく人は自分本位だ。違いがあるとすれば、自覚の有無。

城戸は手ぶらで安藤のアパートに帰って行った。安藤とナミネはお

らず、人形の入った樽にプラスチックの剣を交互に指していく玩具とスケッチブックが床に無造作に置かれていた。

シロクマと思わしき生き物が描かれ、吹き出しには「がおー」とある。手に奇妙なリングを持っていた。矢印が引かれていて、それがあんドーナツだとわかる。

今年の受験も駄目そうだな。城戸は肩をすくめた。

面影？

ナミネが寝静まってから城戸は携帯電話を充電するため、安藤にコンセントの位置をたずねた。すると空いているのは雑貨が占める棚の後ろのコンセントだと言う。

「またわかりにくい場所に」

電源を入れると、執拗にかけられて来た着信履歴と安否を問うメールの受信が表示される。城戸は返事をせずに再び電源を切る。

寝転がり、せめてもの情けと言って渡されたカーテンに包まる。

三月とは言え、まだ寒い。生地はあまりに薄く、心もとない。寝付けず、ふと目を開けると安藤が部屋の片隅で音を消してテレビを見ていた。津波の様子だった。

「ノアの箱舟ってあるじゃないですか。神様が洪水を起こして、ノア以外の不信仰な者を地上から滅ぼす話。あの話の教訓は、ちっぽけな人間の限界だと思うんです」

安藤の隣に座り、液晶を眺める。波に押し流されたものが、また別のものを壊しながら突き進む。なすすべもなかった。あんなものに飲み込まれては確かに一たまりもない。

「何か食べますか。押入れにポテトチップスがあったから持ってきますね」

「結構だ。それにここは君の家ではないのだろうか？」

「やっぱり気付いちゃいましたか」

酒は匂いで駄目と言ったのに冷蔵庫にあった缶チューハイ。自分の部屋だというのに、手提げ鞆に入れられたスウェット。それと女性の一人暮らしだというのに、あげられていた便座。城戸は指折り違和感を覚えた点を挙げていく。

「いくら越してきたばかりとは言え、風呂の明かりのスイッチがわからないのは実に不自然だった。ただ、あのわかりにくいコンセン

トの位置がわかるくらいだ。一定の親交はあるのだろう。おそらく、ここは君が言う、『近くに住んでいる彼氏』の部屋なのではないか」

「あたり。本当によく見てますね」

「射し込んだ月の光が、部屋を深みのある群青色に染めた。
「ところでもう一度聞きたい。なぜオリーブの鉢植えを離して植えているのかね」

「そんなに気にかかるんですか？」

「オリーブの木は野生のままではほとんど実を結ばない。人の手が加わる必要がある。その為、本来は寄せて育てるものだ。二鉢に分けているということは実をつけさせる意思はあるのだろう」

風が出て来たのか、室内に伸びてきたオリーブの影がさわさわと揺れている。まるで触れようとして互いに手を伸ばし合っているように見えた。

少し間をおいてから安藤は言った。「あいつ今、宮城の祖母のところに帰省してるんです」

あいつとは彼氏のことを言っているのだろうとあたりをつけた。

「死んだ祖父の面影があるって可愛がってもらったらしくて。私の家、このアパートの向かいにあるんですよ。窓からも見えます。オリーブをブラインド代わりに使ってるんですよ」

彼女の苦笑が無理していることは明白だった。

「離れると実をつけないなんて知らなかった。嫌がらせに植木鉢を離してやると怒るんです。それが面白くて。宮城に帰る前も『俺のオリーブを枯らすなよ』ってそればかり。悔しいからすぐに離してやりました。そしたら、あんな大きな地震があつて。見たら、鉢植えも倒れちゃつて。そうなんです、寄り添ってないとあんなにも不安定なんだ」

面影？

足先が冷えて、感覚が薄くなってきた。少しずつ指の端から自分ではなくなっていくように思えた。

「私の先輩が言っていました。『命が尊いんじゃない。自分が大切だと思えるものだけを誰だって大切にしている。口に出さないだけさ』って。その時は間違ってるって思ったんです。でも少しだけわかりました」

安藤の表情は読めない。

「わたし今、他の誰がどうなったって良いから彼だけは生きていてほしい。そう思ってるんです。今も電話一本寄越してこないんです。だからわたしは、あいつが帰ってきたら真っ先に出迎えられるよう、ここに居座ってるんです」

飛び立った鳩は、いつになったらオリーブをくわえて戻ってきてくれるんですかね。涙をすすり、安藤は泣きだした。「わたし一人じゃ、駄目なのに」。いく度も区切りながら彼女はやつのことで口にする。

手を伸ばそうと試みていることに気付き、自身の心境の変化に驚いた城戸は一瞬、躊躇ったがその腕を振り下ろすことはしなかった。どうしてこんな簡単なことがあの時に出来なかったのだろう。城戸は不器用に幼子のように泣く安藤の頭を撫でてやる。

「私も、ナミネの母親が死ぬ間際までそう思っていた。何を犠牲にしても彼女には生きていてほしかった」

「教授とナミネちゃんって親子じゃないんですか」

「あれは私の教え子の娘だよ。父親は、いない」

「いない？」

安藤がいぶかしむ。そう、いないのだ。詩でも諳んじるように言った城戸の言葉は天井の暗がり消えて行く。

「深月は美しい女性だった。華やかさはないが清廉さを持っていた、

と思う」

「教授にしては、なんだか曖昧なもの言いですね」

「年を経るごとに私は一つの不安を抱くようになった。すなわち、ありのままの彼女を覚えていたい私の意思とは裏腹に、少しずつ思いうちは美化されてしまっているのではないか、と」

それは本当の深月の姿から徐々に遠ざかっているということに他ならなかった。

城戸は淡々と語る。

「ナミネには彼女の面影がある。あれを見ているのは正直、耐えがたい。実に辛いのだ。そんな私がナミネの父親代わりなど出来ようものか」

移ろいゆく深月との思い出と、色濃くなっていくナミネの持つ彼女の面影。遠ざかるものと迫り来るもの。「君が遠い」。渦巻く二つの思いの真ん中で城戸はいつしか動けなくなっていた。

「教授は失くしたものの重さばかり量ってるんだよ」

ちいさな声だったが、はっきりと聞き取れた。安藤の声は貝殻に耳をあて、海を懐かしむような心地良さがあった。

「ちゃんと手元にあるものを見てあげなきゃ。ナミネちゃんはナミネちゃんなんだから。確かにシロクマの毛皮の仕組みを解いたのは偉大な実績かも知れない。けど、人間の一番の功績は他人に自分の想いを伝えられる言葉でしょ。あの子はずっと何かを伝えたがって筈だよ。糸電話の時だってそう。大事なことはちいさくたって伝わる。でも聞こうとしない人に伝わるわけがないじゃない」

駅前の光景を思い出した。彼も自分のことばかりで駅員の言うことなんて誰も聞いていなかった。

「実に、及第点だ」

オリーブのささめきが、安らかな眠りに誘う。

カートを押してきた乗務員から城戸はコーヒーを受け取った。紙

コップ越しに伝わってくる熱に耐えかねて、しばらく冷ますことにした。新幹線は徐々に速度を上げて行く。

離れ離れのオリブがせわしなく揺れる。もう少しでも良いとアパートを出る間際に城戸は安藤に告げた。すると彼女は、鳩が戻ってきたら厄介でしょ？ と苦笑した。それもそうだと思った。

そのあと、階段のところで大きなポストンバックを持った男性とすれ違った。すいません。彼はナミネにかばんが当たらないように注意しながらのぼって行った。

隣のシートに大人しくナミネは座っている。安藤からもらった手提げには糸電話が垣間見える。城戸は窓の外に目を向けて尋ねた。

「私に何か言いたいことはあったりするか」

いつまでも応答がなかった。高速で移り変わる景色から視線を外してナミネを見やる。少女は気恥ずかしそうに俯いていた。

「どうした？」

あの、と言葉がなかなか続かない。

「言ってみなさい」

「お父さんって、呼びたいです」

胸に何かがすっと落ちた。

「難しいかも知れないが、善処しよう」

考えを巡らす。養子縁組のシステムなど調べてみないことにはわからない。シロクマの毛皮の仕組みの方がよっぽど簡単に思えるくらいだ。

そしてナミネから見えないよう、窓の外に目を移してぎこちない言葉づかいで言った。

「前に持ってきた花が、あっただろう。私も名前を知らんだ。あとで一緒に調べよう」

弾むような返事が聞こえた。コーヒーを口に含む。実に悪くない。飲みほした紙コップを傍らに置く。車窓を小鳥が横切るのを見て、道路から見上げたベランダで寄り添う二鉢のオリブの枝が風に揺れていたのを思い返す。「危機一髪、か」

そして祈るように、城戸は深呼吸をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4917v/>

面影

2011年8月9日03時11分発行